



「100」という価値

～HuRP通信100号とこれからの思いを寄せて～

昨年10月、NHKスペシャル「カラーでよみがえる東京～不死鳥都市の100年～」という番組を見た。東京を撮影した白黒フィルムをNHKが世界中から収集し、フランスのプロダクションと協力して現実に行き得るだけ近い色彩の復元に挑んだ番組である。この番組を見て、カラーテレビが主要な情報源として普及した時代を生きてきた私は、無意識にテレビの映像が白黒かカラーかで日本の近現代史を断絶して捉えていたことに改めて気付かされた。白黒フィルムに投影された明治、大正、そして高度経済成長期以前の昭和の時代に起きた出来事を、今までの自分はまだでフィクション映画の一場面を見ているかのように理解していたと言っても過言ではなかった。しかし、私が白黒で見てきた世界が色を帯びたことで価値観は一変した。当時の人たちも、私たちと同じ青い空の下で色取り取りの服を着て暮らし、時には煌びやかなネオン街で友と酒を酌み交わし、語らい、笑って生きていたのである。100年の間には幾多の試練もあり、関東大震災で人々に襲いかかった炎は、阪神・淡路大震災や東日本大震災で臉に焼付いた炎と同じ色をしていた。そして、太平洋戦争開戦時に東條首相を賛美する声を上げていた人々の映像もまた、私たちと何ら変わらない人間の集団の実像を映し出したものであり、その場面は私たちも将来的に当時の人たちと同じ過ちを犯すかもしれないということを諭してくれているようにも思えた。

この番組を見た後、今まで自分が「白黒」と認識していたものに急に血が通い出したように思えて、無性に「白黒」の時代に触れてみたくなった。そして、私の手元にあった最古の書、末弘巖太郎先生の『法窓漫

筆』（日本評論社）に収録されている中で一番古い「これでも差支えないのでせうか？」という「法律時報」昭和5年11月号掲載の文章を読み返してみた。この文章は、末弘先生が警察署の留置場の惨状を当時の渡邊司法大臣に宛てて訴えた公開状で、以前読んだときには歴史的な資料という意味合いを強く感じた。しかし、改めて読み直してみると、その歴史的資料としての意義を越えて、日本国憲法が制定される16年前の時点で基本的人権の尊重の精神を貫き、横暴な国家権力に対して鋭く言及する末弘先生の魂の聲が熱を帯びて伝わってくるような気がした。当時に比べれば改善されている点が多いものの、真の意味での人道的な刑事司法の形成はまだ道半ばであるということ私たちに痛烈に訴えかけているように思えた。

『法窓漫筆』を刊行した日本評論社は、あと4年で創立100年を迎える。それに際して、最近、過去の文献から「今」を学び直すためのサイト「日評アーカイブズ」を立ち上げた。今日、情報は氾濫し、複雑化している。前述したNHKスペシャルもそうであるように、そのような時代だからこそ、過去から現在を学び、未来を予測することに価値があるといえるのではないだろうか。HuRP通信も100号という節目を迎えた。これまでの軌跡を振り返り、末弘先生の書籍のように100年後にも価値ある存在として残るような活動を展開する気概を持ってこれからも取り組んでいきたい。

(H.O.)



NPO 法人 刑事・少年司法研究センター 第2回講演会
「韓国の司法と日本の司法」 聴講レポート
2014年12月21日 @水道橋・全水道会館



韓寅燮氏

2014年12月21日(日)、NPO法人刑事司法及び少年司法に関する教育・学術研究推進センター(刑事・少年司法研究センター、ERCJ)の講演会「韓国の司法と日本の司法」に参加しました。

第1部講演は、「韓国の国民参与裁判の現状と展望」と題して、まず、弁護士の韓勝憲(ハン・スンホン)氏が韓国の司法改革、国民参与裁判の概要について触れた後、続けて、ソウル大学校法学専門大学院教授韓寅燮(ハン・インソプ)氏がその詳細について丁寧にお話しされました。

メインスピーカーである韓寅燮氏は、国民参与裁判導入が専門司法官僚中心の裁判所が市民中心へと変化をもたらす触媒となったと述べられました。また、国民参与裁判導入後、裁判所は、陪審員評決に羈束力を与えることに前向きな姿勢であるそうです。日本においては、裁判員の判断を上級審がどのように尊重していくかについて、議論が始まったばかりです。類似の制度を持ち、日本の一歩先を行く韓国から学ぶことが多いように思います。

第2部は、この法人が創設した「守屋賞」、「守屋研究奨励賞」の授賞式でした。「守屋賞」は刑事司法に関する優れた実践活動を顕彰するために設けられた賞、「守屋研究奨励賞」は刑事司法に関する優れた研究を行う若手研究者を奨励するために設けられた賞です。

今年度の守屋賞は片山徒有氏(受賞対象活動:被

害者対応の制度改革に関わる活動等)と周防正行氏(受賞対象活動:刑事司法に関する映画制作等)に贈呈されました。

守屋研究奨励賞は岡邊健氏(受賞対象業績:『現代日本の少年非行——その発生態様と関連要因に関する実証的研究』(現代人文社、2013年))、武内謙治氏、(受賞対象業績:『少年司法における保護の構造——適正手続・成長発達権保障と少年司法改革の展望』(日本評論社、2014年))、本庄武氏(受賞対象業績:『少年に対する刑事処分』(現代人文社、2014年))に贈呈されました。

第3部は「刑事司法の可視化」と題して、守屋賞受賞者の周防正行氏と北海道大学教授の白取祐司氏による対談が行われました。対談内容は、映画『それでもボクはやってない』制作の背景、「新時代の刑事司法制度特別部会」委員在任中の活動と委員を終えた後の感想が中心でした。

周防監督が『それでもボクはやってない』において観客に見せたかったことは、ご自分の怒りの感情ではなく、「刑事裁判の手続き」だそうです。「刑事裁判の手続きを淡々と見せるだけで、観客は怒りを感じるだろうと思った」とのことでした。

実は、私が初めてこの映画を観た時に思ったことも、周防監督の言葉通り「淡々とした映画だな」ということでした。もちろん、刑事司法制度に対する怒りも感じました。しかしそれよりも、普通の映画とは違う、淡々とした雰囲気戸惑ったことのほうが強く印象に残りました。



白取祐司氏(左)と周防正行氏

た。

今回の対談で、周防監督の映画制作の意図がわかり、長年持っていたこの映画に対する戸惑いを解消することができました。それと同時に、知らず知らずのうちに自分が周防監督のエンターテインメントの世界にひきずりこまれていたことに気付きました。

今年の講演会で取り上げられたテーマは、韓国刑事司法制度、少年非行の分析方法、少年の保護・少年に対する刑事処分の在り方、刑事司法制度のなかの被害者の位置づけ、芸術・エンターテインメントを

通して見た刑事司法など、多岐に渡るものでした。この紙面ではその一つひとつの詳細に触れることができませんが、それぞれのテーマで交わされた議論は、今後、この法人に置かれている各研究会において研究が続けられることが期待されます。(M.K.)

活動趣旨と内容に賛同していただける会員を募集しているそうです。

詳しくは、<http://www.ercj.org/index.html>(刑事・少年司法研究センターHP)をご覧ください。

伊藤塾沖縄スタディーツアーに参加して

憲法の伝道師こと伊藤真氏が塾長をつとめる資格試験予備校伊藤塾。伊藤塾では、憲法理念の実現を目指す法律家や公務員の養成を目的として、毎年沖縄スタディーツアーを行なっています。昨年度は、12月13日から2泊3日で催行されました。

1日目は、大田昌秀氏(元沖縄県知事)の講演、憲法を实践する村である読谷村の役場や9条の碑の見学、小橋川氏(山内徳信村長とともに基地返還に奔走された方)の講演、チビチリガマの見学。2日目は、辺野古を芦富氏(辺野古のテントで座り込みを続けている方)の解説で見学後、嘉数展望台から普天間基地を見学し、沖縄国際大学にてヘリ墜落現場の見学。佐藤学氏(沖縄国際大学法学部教授)の講義を聴き、宮森小学校と沖縄国際大学への米軍ヘリ墜落をテーマにした映画『ひまわり』の上映会。3日目は、沖縄国際平和研究所の「沖縄戦・ホロコースト展示館」を見学後、中山きく様(白梅学徒隊として沖縄戦を経験された)の講演を聴き、白梅の塔・沖縄平和祈念公園・ひめゆりの塔・平和祈念資料館を見学するという内容でした。

琉球処分には始まり、戦争では捨石にされ、その後も基地を押し付けられている沖縄。米兵による数え切れない少女暴行事件は闇に葬られ、相次ぐヘリの墜落も本土では報道すらまともにされない。CLEAR ZONE(禁止区域)に5000人近い人びとが暮らし、人権が大きく侵害され続けているにもかかわらず、基地を閉鎖するどころか、軍備増強のための新基地建設

が進められようとしている。

沖縄に平和な暮らしを取り戻したい、子や孫に二度とあの戦争を繰り返させてはならないとの思いで、基地問題解決のために、命を削って奔走してくださっている方々から、皮肉にも多数決の民主主義の名において、いわば差別といえる状況が続いていることへの憤りや、絶望感がひしひしと伝わってきました。

講演中に体調を崩されながらも、「辺野古の新基地建設で日本の財政負担が280万ドルから2億ドルになることを知れば、基地建設に賛成する本土の56%の人達も反対するだろうから知らせて欲しい」と語った大田昌秀氏の講演は、生涯忘れないと思います。

講演者の皆さんは、口々に「復帰42年を迎えた今、沖縄は日本に復帰すべきだったのか、日本にとって沖縄とは何なんだということを問い直す時期にきている」「一億人は無関心でも生きていける。けれども一万人の県民は無関心では生きていけない」「沖縄のことは沖縄で決めさせて欲しい」と話していました。

たしかに、私たちは現状、沖縄の問題に無関心でも生きていける本土に住んでおり、投票率も低いことを踏まえれば、沖縄のことは沖縄で決めさせて欲しいというのはもっともなのですが、やはりショックでした。

福島の問題でも感じましたが、どんなに理不尽なことでも、多くの方は、少し離れるだけで他人事になってしまいます。改憲が政治日程にのぼろうとしている今、本土で生まれ育ち、本土に住む私達がすべきことは、沖縄の理不尽な現状や怒りを伝えるだけでは

なく、基地の問題も、原発の問題も、集団的自衛権の行使容認の閣議決定や施行されてしまった特定秘密保護法と相まって、全て私たちの平穏な生活を脅かす深刻な問題であることを伝え、政治に無関心

な人々に自分の問題として危機感をもってもらうことだと感じました。

ひとりひとりが心から平和を願う社会を目指して頑張らしましょう。
(S.K.)

自分の思っていることを伝えること、相手の考えを受け取ること……「表現の不自由展—消されたものたち」を観て……

この展覧会では、抗議が行われそうな“差し障りのある”、もしくは政治性が強いとみなされ、展示先や主催者から撤去を求められた芸術作品—テーマは天皇と戦争、植民地支配、日本軍慰安婦問題、靖国問題、国家批判、憲法 9 条、原発、性表現など—を集め、表現の自由について考えようと呼びかけている。

昨年 8 月の HuRP 通信、戦後 69 年特集号「軍靴の音が聞こえる前に～戦後 69 年・戦前と現在の共通点を探る」で、私は美術表現の自由に対する規制をテーマに、昨今、戦前にあったような美術表現への規制が増えている現状を伝えた。その際に彫刻家・中垣克久氏の「時代(とき)の肖像」について記したが、当展覧会でその資料展示を行っており、東京都美術館副館長の指示により削除された「憲法九条を守り、靖国神社参拝の愚を認め、現政権の右傾化を阻止して、もっと知的な思慮深い政治を求めよう…」という作家の強いメッセージを写真で観ることができた。

他に印象に残ったのは、日本軍「慰安婦」被害者を撮り続けている写真家の安世鴻(アン・セホン)氏の作品だ。彼は 2012 年、新宿ニコンサロンで予定されていた中国に残された日本軍「慰安婦」被害者の女性たちをテーマにした写真展を直前に中止通告された。主催者のニコンは、「世の中で意見がわかれている事柄について一方側の意見を推進するための具体的活動を支援できない」などと理由を並べ、展示を拒否した。安氏は東京地裁に仮処分を申し立て、仮処分決定がなされ展覧会が行われたが、その後、大阪のニコンサロンはアンコール展を認めないと回答。安氏は現在も表現に対する違法な介入を訴えて裁判で闘っている。当展覧会では壁に大きく展示された「重重—中国に残された朝鮮人日本軍『慰安婦』の女性たち」の他に、ファイリングされた写真も観ることができる。ちょうどトークショー前の安氏に会うことができ、氏は「写真を拒む被害者ももちろんいる。まずは話を聞き、その方のことを知ろうと努め、最後に撮影させてもらう」と被害者たちへの誠意について語ってくれた。安氏は、一枚の写真が持つ意味は世界を変えることができると信じ、人びとの心を動かし、真実の歴史を鑑賞者とともに記していきたいと、慰安婦被害者の写真記録を続けている。

展覧会を主催する実行委員会は、芸術家、美術評論家、市民団体や学生などからなる。会場では、原発事故後の福島を取り上げた「美味しんぼ」や図書館から回収された「はだしのゲン」なども閲覧できる。表現の自由が侵害されたとき、その表現されたものを見る、受け取る側の知る権利も同時に奪われることになる。本来ならば、これらの作品は展示される場所や時間がそれぞれあったはずだが、この機会に「表現の不自由展」に出かけ、作品を堪能し、作家の表現を受け取り、個々に想いを巡らせてほしい。(M.A.)

※ 2015 年 1 月 18 日～2 月 1 日 / ギャラリー古藤(東京都練馬区栄町 9-16) / 入場料: 500 円

www.facebook.com/hyogennofujiyu / <http://furuto.art.coocan.jp>



【祝! HuRP 通信 100 号記念*編集後記】▼1 月 7 日、パリ銃撃事件後の「私はシャルリ」というアピールが印象的でした。1 月 17 日、阪神・淡路大震災から 20 年という節目。そして 1 月下旬、イスラム国による日本人質事件…今年はどうなる年になるでしょう。▼100 号記念付録の「茶色の朝」、ぜひ高覧ください! 感想もお待ちしております。▼今年も HuRP は人権・平和をテーマに新たな企画を実現できるよう計画中です。本年もどうぞよろしく願い申し上げます。(望)